

1月号の主な記事: 芸術監督はこう選ぶ2

今月号の日本語ページは、先月号で好評を博した「芸術監督はこう選ぶ」の第二部(要約版)です。ダンサー選択の基準、プロセス等についてマギー・フォイヤーが取材しました。



フィンランド国立バレエ芸術監督ケネス・グレーヴェ
Photo: Heikki Tuuli

多国籍カンパニーが大多数を占める現代、芸術監督は欠員を適切に補充しつつ団固有のカラーを保つ必要を実感している。付属のバレエ学校があればそれほど難しいことではなく、東欧やロシアのバレエ団では大々的にオーディションを行う必要がない。シベリアのノヴォシビルスク・バレエでも、オーディションは個別に行い、DVD審査に通ればカンパニー・クラスに招くという方法をとる。監督のイーゴリ・ゼレンスキーは団の水準に満足で、「いいダンサーが大勢います。でもそれはジャンプやターンが巧いという意味ではありません。大事なことは本物の芸術家であること。」一方で、グルジア国立バレエのニーナ・アナニアシヴィリは、大規模なバレエ学校が併設されているにも関わらず、今年は「一緒に仕事することで私も成長できる若いダンサー」を求めて、オーディションを行うという。

スウェーデン・ロイヤル・バレエの元監督で2009年から香港バレエを率いるマデリーヌ・オンヌは、入団希望者の水準にはムラがあると感じている。

ストックホルムでは「とても高レベルでした。安全な街だし人気があったのね。でも香港は遠いし治安も気になるしで、欧米から見ると魅力に欠くようです。」前回のオーディションは、「香港社会と同様に団員の2割を欧米人に」という理事会の意向と「北京中央バレエ団とは違う個性を」というオンヌ自身の希望から、わざわざニューヨークで開催したものの低調に終わった。香港バレエの個性とは「アジア人を主体に欧米のスパイスを効かせること。」だが現実には団員の8割が中国本土出身で、「彼らのレベルが高すぎるのが問題」なのだという。「中国では、体型がバレエ向きでなければ入学もしません。すばらしい身体条件の団員に混じると、西洋人としてはスリムな人でも、ごつく見えてしまう。男性は男らしさにつながるので問題ありませんが、女性は困りますね。」

フィンランド国立バレエのケネス・グレーヴェには、もう少し選択の幅がある。大所帯で多彩なレパートリーの同団は、今年研修生8人、正団員4人を採用したが、決め手は「オーディションのクラス

を芸術に変える」彼らの「鋭敏さ、職を得たいという真剣さ」だった。アナニアシヴィリが重視するのも熱意と頭のよさだ。「プロポーションやポジションが抜群でも、全身の調和や考える力がなければ無用の長物」で、大成するのは賢くて向上心のある人だという。将来性を予想しての選考は直感が頼りだが、「当たったり、当たらなかったりね。」

さまざまな体型の団員を擁する小カンパニー、ゴータイエ・ダンスの主宰者エリック・ゴータイエにとって「身体は美しく引き締まっていること」が必要条件であり、「舞台上魔法をかけるためには、強い個性の持ち主でなくては」ならない。オーディションではまず通常のクラスを行い、通過者に1時間ほど現代作品を踊らせて動きの質をチェック。男性が女性をどう扱うかを見るためのリフトが続く。そして“モノログ”と呼ばれる最終審査は、「一日中踊って疲れ切った状態で、だからこそ露わになるものを見るためのものです。ダンスを始めた時から今僕の前に立って仕事を求めているこの瞬間までの人生を語ってもらうのですが、とても濃密で美しい時間です。」

内面を包み隠さず見せてほしいとは、多くの芸術監督の求めるところでもある。グレーヴェによれば、「それは本質にかかわる問題で、嘘のつけない部分でもあります。これ見よがしな人ではなく寡黙なダンサーにこそ、いい意味で驚かされることが多いですね。どこに入るかは大きな選択。受ける側も、自分を正当に評価してくれる居心地のいいところをしっかりと見きわめて。」

応募の際の問題点としてオンヌは、舞台をそのまま録画した映像は、誰が応募者なのか判別不能、全身が小さすぎる等の問題が多く不適切と指摘し、グレーヴェは履歴書添付の写真をフォトショップ等で加工しないよう忠告している。ほとんどの監督は審査は慎重に行いたいと考えており、クラスでの態度も重視する。オンヌは意欲のなさや自信過剰には厳しいが、アジアのダンサーは「熱心でコンクール歴も輝かしく、西洋人とは精神構造が違う」と感じている。「がむしやりにやることが、結局一番大事」とアナニアシヴィリも声を揃えるが、ゴータイエの言うように、芸術監督とは「すぐ前向きな人種。エネルギーのある人は立っただけですぐにわかるから、愛想笑いなんて不要です。でも他のダンサーをどんな風に見ているか、美点を認めているか。じつはこれが、僕にとっては決定的なポイントですね。」(訳:長野由紀)